2023 第9回 これからの建築士賞

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近は他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

審査結果

入賞5点（応募点数17点）

1	業績名	石ころの庭
	受賞者	岩瀬 諒子、遠藤 郁
2	業績名	“Flying Dragon” 地域を活性化する「汎用性ある仕組み」の構築
	受賞者	堀川 秀夫、田中 秀弥、名和 研二
3	業績名	町会長建築士が取り組む下町まちづくり
	受賞者	金谷 直政
4	業績名	さまざまな公共性に寄り添うメディウムとしての空間 －HIRAKU IKEBUKURO 01 SOCIAL DESIGN LIBRARY－
	受賞者	松原 菜美子、田中 比呂夢
5	業績名	ニューマチヅクリシャ
	受賞者	一般社団法人ニューマチヅクリシャ／スタジオメガネ一級建築士事務所 横溝 惇

審査員による総評・講評および入賞作品の詳細は、こちらからもご覧いただけます。
https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/pdf/korekara-vol.9.pdf

過去の受賞提案こちらからご覧いただけます。
https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/index05.html

募集要項

1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。
未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞　10点程度（但し、応募点数による）

3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが首都圏にあること。過去の応募者の再応募は可とする。
審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

5. 審査員

石川 初　（慶應義塾大学 環境情報学部 教授）
加藤 耕一（東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授）
高井 啓明（株式会社 竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア）
西田 司　（オンデザイン代表／東京理科大学准教授）

6. 審査・顕彰

6月 上旬　公告
8月31日　応募書類提出締切
9月 下旬　審査会
2024年6月上旬　東京建築士会総会の席上で顕彰予定

7. 発表・その他

受賞者の活動資料を上記総会時に配布します（活動資料はA4版、受賞者が作成するが、場合によっては推薦者が協力する）
受賞者及びその活動資料については本会会誌、ホームページに講評とともに掲載するほか、各メディアに公表予定。
※後日、審査員と受賞者によるプレゼンテーションの機会を準備する予定。

8. 応募締切

2023年8月31日（木）必着
応募書類は、下記のメールまたは郵送にて提出ください。
郵送の場合は、8月31日の消印有効。

9. 応募書類提出先・お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会　「これからの建築士賞」係
〒103-0006 東京都中央区日本橋富沢町11-1 富沢町111ビル5階
TEL：03-3527-3100　FAX：03-3527-3101
E-Mail：event02@tokyokenchikushikai.or.jp
https://www.tokyokenchikushikai.or.jp/

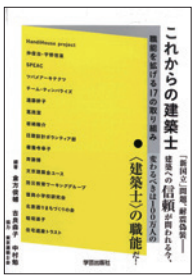
関連情報：話題の書籍

これからの建築士 ―職能を拡げる 17 の取り組み

建築への信頼が問われる今、変わるべきは 100 万人の＜建築士＞の職能だ！

第１回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士―職能を拡げる 17 の取り組み』（編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉　協力：東京建築士会）が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売
定価：2,530 円（税込）
発行：学芸出版社
http://www.gakugei-pub.jp/



[第９回 これからの建築士賞]

総評文

石川 初（慶應義塾大学 環境情報学部 教授）

この賞の審査を担当して２年目となりました。今回、昨年度に比べて応募数が大きく増えたことは嬉しい驚きでした。応募された書類に載っている様々なプロジェクトや仕事を拝見しながら、建築士が担いうる職能の拡張にはまだまだ色々とあるもんだ、というのが正直な感想です。今回は特に、まちづくり・地域づくりへの貢献が多いように感じました。空間や施設を構想し、それを実装することで問題を解決する、そういう実践で鍛えた思考とスキルが地域社会や共同体の課題解決に発揮されるということを、あらためて実感しました。この点において、応募されたプロジェクトや応募者の活動・活躍の内容はどれも建築士のスキルを活かし仕事を拡張するものとして優れた事例となっていたと思います。そのなかで特に「これからの」建築士として注目したのは、その実践内容自体が職能を越境するような、より冴えた一歩を踏み出していると思われたプロジェクト・活動でした。今回、惜しくも受賞対象として挙げられなかった応募者・応募チームの皆さんも、これからの動きに期待を抱かせるものが多くありました。応募下さった皆さん、ありがとうございました。

石川 初（いしかわ はじめ）

慶應義塾大学環境情報学部教授、博士（学術）／1964年生まれ／1987年東京農業大学農学部造園学科卒業／鹿島建設建築設計本部、米国HOKプランニンググループ、株式会社ランドスケープデザイン設計部を経て、2015年より現職／著書に「思考としてのランドスケープ　地上学への誘い」（2019年度造園学会賞）「ランドスケール・ブック」「今和次郎『日本の民家』再訪」（瀝青会として共著、2012年度日本建築学会著作賞、日本生活学会今和次郎賞）など／2018年度東京農業大学造園大賞「ランドスケープから“地上学”へ―場への新たな概念形成とランドスケープの裾野を広げる多面的展開」

加藤 耕一（東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授）

私たちは大きな時代の転換点に立っています。この時代に「これからの建築士」は何を目指し、何を実現していくのでしょう。その問いに対してどのような解が提示されるのか、たいへん楽しみに今回の審査に加わらせていただきました。多数の応募の一つひとつを拝見し、この変化の時代のなかで、建築士という生業そのものが、定まった路線の上を進むだけのものではなくなり、道なき道を切り拓くための発想力や行動力が、ますます必要とされていることを強く実感しました。多数の応募はいずれも興味深く、正解は決してひとつではないこと、その可能性が多様に拡がっていることを示していただいたように思います。「建築士」とは専門性に基づいた「士業」ですから、「これからの建築士」としての活動が、新たな「業」のあり方に結びついていくことも重要だろうと思います。専門家として切り拓かれた新たな仕事は、どのような新たなビジネスを生み出していくのでしょう。また、審査員の議論のなかで、始まったばかりの新たな試みについては、もう少し継続性を見てみたいという理由から、今回の受賞については見送りになった応募もありました。ぜひ活動をさらに盛り上げて、再応募していただくことを楽しみにしています。

加藤 耕一（かとう こういち）

1973年東京生まれ／1995年東京大学工学部建築学科卒業、2001年同博士課程修了・博士（工学）／2002～2004年東京理科大学理工学部助手／2004～2006年パリ=ソルボンヌ大学客員研究員／2009～2011年近畿大学工学部講師／2011年東京大学大学院工学系研究科准教授／2018年～同教授／主な著書：『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会、2017）、『ゴシック様式成立史論』（中央公論美術出版、2012）、『「幽霊屋敷」の文化史』（講談社現代新書、2009）／主な受賞：日本建築学会賞（論文）（2018）、建築史学会賞（2018）、サントリー学芸賞（芸術・文学部門）（2017）、日本建築学会奨励賞（2004）他

高井 啓明（株式会社 竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア）

今回は17件の応募があった。大きく分けると、地域の街づくり系（タウンマネージャー、区のまちづくり、既存タウン再生）、新築・改築の事例系（小学校改築、障害者就労支援施設、店蔵の再築、伝統芸能劇場への改修、町民施設竣工後のみまもり組織、コミュニティライブラリー）、地域密着型街路系（杉並、本郷、商店街ライトアップ）、役割拡張系（建築協定、工務店における職業教育、マンション管理コンサル）、資材活用系（石ころ、既存ガラス）、他にも海外輸出教育（カイロ旧市街）の実績提案があった。私の観点からは、改修によるオペレーショナルカーボン削減、建設時カーボン削減の視点からの提案は残念ながら無かったが、既存利活用や改修の提案があり、建設時カーボン削減に大きくつながっている。資材として石ころを途中下車させ庭に活用した事例はユニークで、仮設建築などへの応用の可能性を感じた。既存改修では再生建築の優秀事例が複数あり、その中から既存資材活用も考慮の上、コミュニティライブラリーが選ばれた。全般的に建築作品をつくり完成させることから脱却し、新しい建築士像を目指している提案がほとんどで、選考審査では議論も白熱し、再チャレンジを期待して選外とする提案もあったことを付記したい。次回以降の提案に期待したい。

高井 啓明（たかい ひろあき）

1982年竹中工務店入社、2001年設計部設備部門マネージャー、2015年から設計本部プリンシパルエンジニア（環境）／専門分野は建築環境設計／国交省建築環境部会委員、日本サステナブル建築協会理事、空衛学会理事（歴任）、CASBEE研究開発委員会委員、日建連カーボンニュートラル設計専門部会主査等／表彰は、井上宇市記念賞（2021）、稲門建築会特別功労賞（2022）、空衛学会賞技術賞、サステナブル建築賞、カーボンニュートラル賞、ASHRAE Technology Awards First place Winnerなど多数

西田 司（オンデザイン代表／東京理科大学准教授）

今年度はじめて賞の審査に加わったが、大変エキサイティングな議論であった。審査の前に「これからの」が何を示すのか？（設計なのか、取組内容なのか、年齢なのか）と朧げに考えていたが、エントリー作品を一つ一つ読み込み、議論を重ねてみると、「これからの」が、仕組みの開発であったり、職能の拡張であったり、新しいタウンアーキテクトのあり方であったりと、作品の切り口は多岐にわたり、審査する側が試されているような審査会であった。印象的な作品を幾つか紹介すると、「町会長建築士が取り組む下町まちづくり」は、決して若手ではない金谷氏が取り組む町会長としてのまちづくりと設計で、20年以上かけて墨田のものづくりとまちづくりをサポートし続けている実践は、これからのタウンアーキテクトのモデルになるような事例であった。「石ころの庭」は、印象的なランドスケープの写真に目を奪われがちであるが、背後にある建築現場のマテリアルフローが秀逸で、アップサイクルというより、タイムシェアに近い感覚をもった取組である。「ニューマチヅクリシャ」は、審査員全員の共感を得た若手建築家と商店主、キュレーター、まちづくり専門家チームの提案で、デザインも、場の設計も、取組内容も、webなどの活用も、どれも実用的かつ実践的で、ここからの動きを注目したい。

西田 司（にしだ おさむ）

1976年生まれ／使い手の創造力を対話型手法で引き上げ、様々なビルディングタイプにおいてオープンでフラットな設計を実践する設計事務所オンデザイン代表／近作に「まちのような国際学生寮」「TOKYO MIDORI LABO.」など／東京理科大学准教授／ソトノバパートナー／編著書に「オンデザインの実験」「楽しい公共空間をつくるレシピ」「タクティカル・アーバニズム」「小商い建築、まちを動かす！」

1

石ころの庭

岩瀬諒子、遠藤郁

業績名：石ころの庭
候補者名：岩瀬諒子設計事務所 / 岩瀬諒子 + 遠藤郁

石ころの庭

京都市の文化的なエリアである岡崎地域に立地する、京都市立の公共劇場ロームシアター京都の中庭を敷地として、週末はさまざまなジャンルの催しのためのパフォーマンス会場、日常には憩いの場として機能する空間という要望に応えるかたちで「石ころの庭」をつくった。

1,000m2を越えるそれなりに広い敷地に、4週間という限定的な期間のための空間を立ち上げるにあたって、環境的側面や資材不足の社会情勢からも、大量の資材を使い捨てる構築手法から脱却する必要があることは明確であった。そこで材料や工法のみならず、どこから何をどのように調達するかという建設におけるフローから、仮設建築の設計手法を問い直し、採石場から建設現場に向かう砕石を敷地に「途中下車」させて使用することを考えた。敷地に運び込まれた230tの砕石たちは、会期が終わると建設現場へと向かう。

「石ころの庭」の石のあり方は、庭石であると同時に、採石場に積まれているのただ無数の石と、建設現場の部材としての石、そのどちらにもなりきっていないとの間に存在を見出された「並べられている石石が石そのものとして並べられている状態」である。どちらでもない、間の状態を表面化することは、そこに訪れる人々の振る舞いも規定せず、遊びという自由さをを担保していたように思う。

'仮設'の再考

本来、別の建設現場に運搬する予定だった砕石の順序を変えて「途中下車」させ、石組のようなオブジェに変え、パフォーマンスのための空間を創り出す。

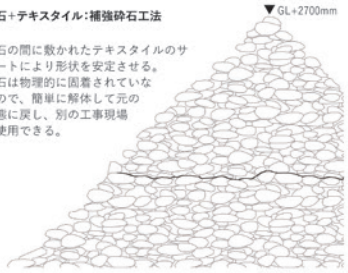
仮設劇場×公共空間

石組は人びとの様々な解釈の中で、パフォーマンスや日常生活のために多面的に機能するようにデザインされている。

設計：岩瀬諒子設計事務所 / 岩瀬諒子 + 遠藤郁
所在地：京都府京都市左京区
主用途：仮設劇場，公共空間

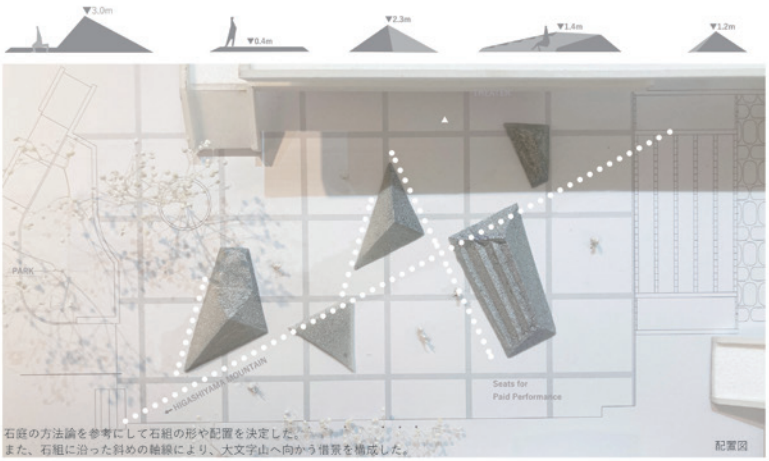
砕石+テキスタイル：補強砕石工法

砕石の間に敷かれたテキスタイルのサポートにより形状を安定させる。砕石は物理的に固着されていないので、簡単に解体して元の状態に戻し、別の工事現場で使用できる。



断面詳細 S=1:10

砕石によってつくられる5つの石組



石庭の方法論を参考にして石組の形や配置を決定した。
また、石組に沿った斜めの軸線により、大文字山へ向かう借景を構成した。

配置図

京都にある公共の劇場の中庭に、仮設の屋外演劇ステージと観客席を設けたプロジェクトである。材料として建設現場で使われる予定の砕石が用いられた。現代的な日本庭園の石組みを思わせるその配置や造形の巧みさもさることながら、仮設のための資材を「安く買って使い捨てる」のではなく、流通する建材を（作者の言葉を借りると）「途中下車」させるという発想に驚嘆した。建築生産の仕組みへの理解と洞察、建材の知識と素材の探求を通して提示された従来の建材を用いた新しい表現、空間の意匠や利用者の介入の誘発など、建築士に求められるスキルが充分に発揮されつつその拡張に向かう「これからの建築士」の仕事と呼ぶにふさわしい。

石川 初

2

“Flying Dragon”地域を活性化する「汎用性ある仕組み」の構築

堀川 秀夫、田中 秀弥、名和 研二

－いろんな人が参加可能な、ゆるく単純ながらも多様な表情を生む仕組み－

堀川秀夫、田中秀弥、名和研二

駅前商店街の活性化を促すｱｰﾄｲﾍﾞﾝﾄ作品をきっかけに社会と街にﾒｯｾｰｼﾞを送る「汎用性ある仕組み」の構築を目指したﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄである。当商店街には飲食店が多いことから使用済みを主とした割り箸をNPOを通じ調達し、ｲﾍﾞﾝﾄ終了後、破損割り箸を製紙会社にてﾊﾟﾙﾌﾟ原料化する道筋を立て、それをSDGsを啓発するｲﾝｽﾀﾚｰｼｮﾝとして商店街全域に亘らせる方法を実践したものである。

今回商店街の突き当りに地域の病院があり、ｺﾛﾅ禍に奮闘する医療従事者に向けたｴｰﾙとして英国から始まったﾌﾞﾙｰﾗｲﾄﾌｪｱを施す下地として活用することで、光が織りなすｱｰﾄと社会、街を結ぶ集大成を目指した。

誰でも、どこでも、いつでも：仕組みの条件

①誰にもすぐ理解できる簡単つくりなこと
②身近な材料であること
③短時間に量産できる単純な繰り返しﾊﾟｰﾂであること
④場所を選ばずでここでも作業できること
⑤安全面・作業性から軽量であること
⑥分業可能なようにどこからでも着脱可能なﾊﾟｰﾂであること
⑦造形の自由度があること
⑧全体ｾｯﾃｨﾝｸﾞｽｹｼﾞｭｰﾙ以外はいつでも個別作業ができること
⑨移送、搬出入がしやすくするためにｺﾝﾊﾟｸﾄになること
⑩分別ﾘｻｲｸﾙに必要な解体可能であること

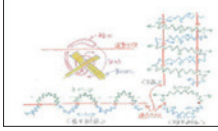
割り箸らしさ：膳単位。割り箸の所作を形に

ｲﾍﾞﾝﾄがﾃﾝﾎﾟﾗﾘｰであることから、割り箸の接続や取り付けは接着剤や釘等のしっかりとした固定物ではなく、なじみがあり固定に際してある遊びとしなやかさを持った屋外使用に一定期間耐えうる対候性輪ｺﾞﾑを採用した。

つくり方：割り箸と輪ｺﾞﾑで誰でもどこでも時間を掛けずに量産(メイキング動画配布)

自由な造形：ﾊﾟﾝﾀｸﾞﾗﾌ、南京玉簾のようにしなやかに

割り箸らしさを残すために接続割り箸単位を膳単位とし、それらを順次単純に挟み込みながら連続させ2膳単位ごとにﾄﾗｽ形状に輪ｺﾞﾑで閉じると自然に螺旋を描き立体的で自由に変形するﾊﾟﾝﾀｸﾞﾗﾌのような立体二次元ﾄﾗｽ割り箸ﾊﾟｰﾂを生み出した。下記特性と製作しやすさを活かすためあえて構造的に安定した三次元ﾄﾗｽとしていない。



自由なｾｯﾃｨﾝｸﾞ：生け花、ﾓﾋﾞｰﾙのようにﾊﾞﾗﾝｽよく

ｾｯﾃｨﾝｸﾞには道糸としてﾃｸﾞｽを基本2本約10m毎にあるﾊﾟﾅｰﾎﾞｰﾙに張り、それに輪ｺﾞﾑを用いて、生け花のように調子を見ながら上下左右自由に曲げ・ひねりながら取り付けられるようにした。上下のｱｰﾁ形状による反力のﾊﾞﾗﾝｽで道糸ﾃｸﾞｽの幅がなるべく不均一にならないようにしている。

製作風景：ｺﾛﾅ禍で対面授業のない学生や小学生、高校生、地元住民、ｲﾍﾞﾝﾄ参加ｱｰﾃｨｽﾄも参加

事前告知から材料を配布し個々でのﾊﾟｰﾂ作成＋個別搬入、現場での集団作成、現場ｾｯﾃｨﾝｸﾞと製作風景は様々。ｾｯﾃｨﾝｸﾞも一気に行わず徐々に作成しその過程もｱｰﾄｲﾍﾞﾝﾄの作品の一部となっている。

荻窪の駅前商店街にて、駅前の大通りから商店街の突き当たりの地域の病院まで、割り箸と輪ゴムのパンタグラフ構造でつくられた全長２kmにわたる青い光の天井をつくり出したインスタレーションである。折りたたみ可能で、移送・搬出入が容易な軽く安全な構造であり、イベント終了後には破損した割り箸を製紙会社でパルプ原料化する筋道まで立てたところが徹底している。夜空に光るブルーライトは、コロナ禍における医療従事者への応援メッセージであり、都市空間に対する建築的操作が、地域社会と結びつく成功例となった。商店街関係者に請われて、このイベントがすでに過去３年継続している点も高く評価できる。今後のさらなる発展に期待したい。

加藤 耕一

3

町会長建築士が取り組む下町まちづくり

金谷 直政

町会長建築士が取り組む下町まちづくり　設計スキルを使った「ものづくり」「まちづくり」の実践

社会は複雑さを増し、一つの問題を解決すれば別の問題が起こる繰り返しである。複雑な社会をスムーズに動かすためには、総合的に課題を解決し行動する人格が必要となる。建築の設計は、異分野にまたがる課題に向き合いプロジェクトを進める連続である。その担い手である建築士は、複雑な課題を総合的に処理する事を得意としていることから、設計のスキルを活用して、地域の課題に向き合い、解決に向けて貢献することが可能である。候補者は、東京の下町、墨田区での建築の設計を通して、医療・福祉、ものづくり、環境、防災、地域経済、コミュニティ等の課題解決のお手伝いを行っている

金谷直政

ものづくりの調整役（2021~）

墨田の町工場は、一品一品注文を受け高品質のモノを作っている。候補者は「すみだ六次化支援ネット」事務局長として、発注者と製造者の間に入り、与条件、納期、コスト等を調整。発注者が要求する製品の開発が可能となり、発注・受注の新たな機会が生まれている

会合の様子

作業船

木密地域の水源確保（2015~）

候補者の活動拠点である木密地域は、建物倒壊危険度、火災危険度が高く、40年にわたり防災性強化の活動を続けてきた。候補者が座長を務めた「水活用勉強会」では、火災時の消火の水源が足りないことがわかり、地元での防災用水の確認、視察、勉強会を重ね、井戸の必要性を区に提言。子供が遊ぶことができる防災用の井戸と広場の設置が実現した

課題提起

井戸と広場

観光客を呼び込み商店街活性化（2017~）

長屋が多い京島地域は、住戸の間口が狭く土地の有効活用が困難であった。候補者は敷地9.8坪の古家を鉄骨3階の旅館に建替え、自ら運営を行っている。地域唯一の旅館は、商店街への旅行客の誘導に役立ち多くの海外旅行者が商店街を利用。「まちに賑わいが出てきた（商店街事務局長談）」

おでん屋と宿泊客

海外からの宿泊客

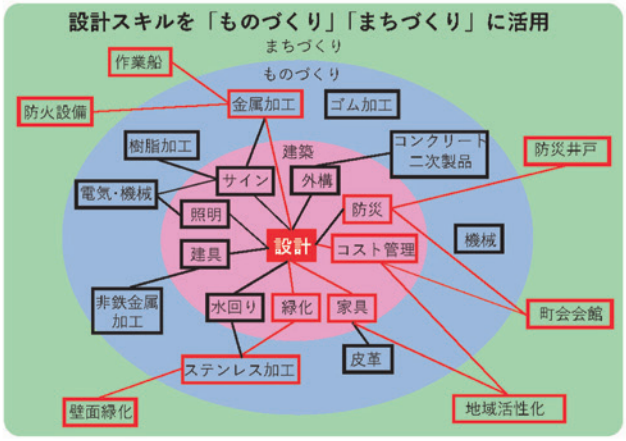
間口2間の宿

町会会館 強靭化（2021~）

町会長である候補者が中心となり、築70年超の会館を災害時の拠点、日常の交流の拠点として建替えた。地価・建設費が高騰していたが、区分所有者、金融機関と折衝を重ね、詳細な資金計画を立て建設が実現。耐震等級3、雨水利用、防災井戸等防災対策とバル誘致、神輿の展示等町角に賑わいを創出した

詳細なシミュレーション

吾妻町ウエスト



いわゆる下町の住宅密集地に事務所と自宅を構え、当事者として地域活動に携わっている建築士である。町会長として地元に関わりつつ、防災井戸を設けて「井戸端」を作る、町にゲストハウスを設けて観光客を呼び込む、資金計画まで立案して町会会館を建て替えるなどの仕事をこなしている。紹介されているこれらの仕事は、その土地と社会の問題を分析し、潜在する資源の可能性を引き出し、その場所に合った形で組み立て運用するという「建築」のプロフェッションが拡張的に応用されたものだ。紹介されたプロジェクトの様子の多様さも、あくまで地元の事情が優先されたことを示唆するものだろう。敬意を込めて「建地区士」とお呼びしたい。

石川 初

4

さまざまな公共性に寄り添うメディウムとしての空間
—HIRAKU IKEBUKURO 01 SOCIAL DESIGN LIBRARY—

松原 菜美子、田中 比呂夢

SOCIAL DESIGN LIBRARY
HIRAKU IKEBUKURO 01

さまざまな公共性に寄り添うメディウムとしての空間

公共建築でなくとも建築に公共性をもたせることは、建築を社会と接続させる方法の一つとして近年浸透しつつある。ただし、施主や利用者、そして設計者がそれぞれにもつその接続の仕方のイメージは、必ずしも合致するわけではない。本計画は、その歪を調停するのではなく、関係者全員の理想を混ぜ合わせながら、複眼的な価値を見出そうとするものである。
敷地は豊島区上池袋、築30年の二階建事務所ビルを改修した。大学を退官し新たな活動場所を探していた教員と、社会貢献事業に興味を抱く地元建材卸企業を中心として、まちのキーマンや編集者、起業家などが集まり、本を介したコミュニティライブラリーをつくることとなった。
元教員の蔵書は様々な価値観に触れる知の媒体であり、地元企業のガラス建材は隔てられた空間を視覚的につなぐ媒体である。それぞれのメディウム（媒体）としての機能に着目し、ひいては建築自体が〈上池袋のメディウム〉として、人やアクティビティをつなぐ媒体となり、人と建築の関係性を編み直す空間のあり方を模索した。

©Kochi Torimura

地域の表と裏をつなぐ

池袋駅から徒歩12分の上池袋2丁目、北側には下町の風情が残る住居系地域が広がり、南側には首都高や山手線、東側には明治通りなどの商業地域が取り巻まく、ちょうどその境目に敷地はある。北上すると地域唯一の子安稲荷神社があり、地域の重要なよりどころとなっている。本計画では、表通りと裏通りをつなぐ役割を建築に持たせることで、地域住民だけでなく、訪れた人がより深く上池袋に興味を抱くきっかけとなることも目標の一つとしている。

©Kochi Torimura

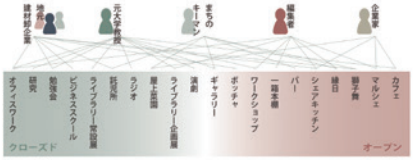
減築による外部空間の引込み

南北の外壁を一部撤去し、吹き抜けを設けることで外部が貫入するような内部空間を計画した。

この空間は、可動間仕切りや展示什器等を一つのきっかけとして、使い方に応じてまちに対して閉じたり開いたりし、人や物、そこで起こるアクティビティをつなぐ媒体となる。

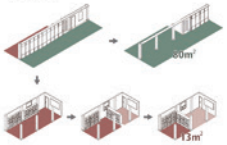
アクティビティの多様性と場の持続性

プロジェクトの立ち上げメンバーの職種は様々で、得意分野や、やりたいことが異なっているため、まずはここで行われうるアクティビティを洗い出し、それぞれのオープン・クローズド具合を認識することから始めた。また、この場が持続・自立していくために、運用後もアップデートし続ける仕組みを同時に検討していった。



建具や本棚の移動によって変化する領域

1階の広場・スタジオ・書店スペースは、大型の木製建具の開閉と可動本棚の移動により、活動内容や参加人数に合わせて最大80m2から最小13m2に可変する。



©Kochi Torimura

多様な接点を生む本棚とサイクルガラス

選定された本を展示物として魅せる本棚や、誰でも自由にアクセス出来る一箱本棚など、建物全体に多様な本棚が計画されており、目的に合わせ、それぞれ異なる設えとしている。また、廃棄される予定であったヴィンテージガラス（cyclcleglas）を照明器具や可動型ガラスパネル、大型建具などにリユースしている。

©Kochi Torimura

個室のパーテーションや照明にcycleglasを活用

定期ミーティング コアメンバーは月2回のペースで意見交換を重ねた

地域イベント視察 池袋地域の理解を深めるため、メンバー主催のイベントに参加

キックオフ現況確認 倉庫的に利用されていた事務所にて活用方法を検討

シェア型書店視察 シェア型書店を学ぶため、メンバーで視察を複数回行った

プレキッチン利用 将来のキッチン利用を想定して飲食のサービスを行った

シェア型書店説明会 シェア型書店オープンに向けて説明会を実施

プレオープン 主に関係者向けにプレオープンイベントを実施

常設展開始 本の展示第一弾として常設展「社会デザインへの招待」が開催

プロジェクトスケジュール

2022.2 準備期間 → 2022.9 実験期間 → 2023.5 プレオープン期間 → 2023.7 本格始動

古材ガラス選定 レスキューされたサイクルガラスを選定し、使い方を検討

解体法適合調査 改修のための解体とエレベーター設置のための法適合調査を実施

既製品家具活用検討 オフィス入居者から譲り受けた什器の活用方法を検討開始

本の収納分類WS 「どのように分類すれば書庫の使い勝手がよくなるのか」を議論

意見交換会 ゲストを招いてトークセッションを行い、場の在り方を探求

本棚WS開催 「本を起点としたコミュニケーション」が生まれる本棚を議論

お絵かきWS 子どもが楽しめるガラスペイントの体験ワークショップを実施

ポップアップDIY WSの成果物等は運営メンバーがDIYで什器を作製し展示

シェア型書店運用開始 第一弾の棚主が決まり、シェア型書店がオープン

朗読劇開催 劇団による子ども向け朗読劇「チョコレートと悪魔」が開催

企画展開始 企画展「社会をデザインするビジネス」が開催

mtthw マシュー建築設計事務所
松原菜美子　田中比呂夢

上池袋の2階建て事務所を、元大学教授の蔵書を起点としたコミュニティライブラリーに改修した事例。民間施設に公共性を持たせることがテーマとなり、建築士2人は、地元建材卸企業、元大学教授、編集者、実業家、構想家の多様な意見を建築に反映する建築のディレクターを務め、彼らに伴走している。地域の子安稲荷神社参道の軸線を1F広場まで引き込み、建物内の公共性を顕在化。古材ガラスの再利用、可動式大型木製窓、既製家具の活用、新設窓ガラスの熱性能、木製本棚の製作と可動配置など、さまざまな工夫が見られる。地域に根差した運営を目指し、トークセッション、読書会やマルシェ、アートの展示、シェア型の書店・キッチン・オフィスが始まっている。既存利活用と改修は、建設時カーボン削減に大きく貢献している。また公共性を伴うアクティビティ創出に尽力し、建築士の領域を大きく拡大しており、これからの建築士賞に値すると評価する。

高井 啓明

5

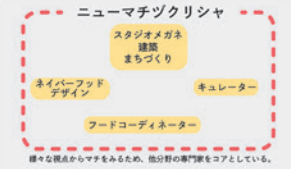
ニューマチヅクリシャ

一般社団法人ニューマチヅクリシャ／スタジオメガネ一級建築士事務所　横溝 惇

ニューマチヅクリシャ - 思い描く風景を見せることから始まる、カジュアルなリノベーションがある -

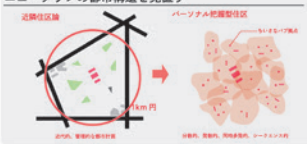
人口の急増を背景として 1970 年代に入居を開始した日本最大級の多摩ニュータウンは、常に社会変化の最前線に置かれてきた。ベッドタウンとしてつくられた多摩ニュータウンは、都市たり得るか。その実践として、多摩ニュータウンを拠点に活動するアーティストや商店主、専門家、地域住民が集まり、それぞれの視点を組み合わせながら、ニュータウンの風景を問いなおす試みを続けている。近隣住区論による思想が下敷きにあり骨格ができているニュータウンは、学校区単位でコミュニティの形成街区が定められており、開発当時は見事にそのコミュニティ構造がハマり、人々は郊外生活に豊かさを求め、目標とする生活スタイルが確立していき、その目標に近づこうとした。しかし５０年の時を経て、現代のコミュニティのあり方は多様になり、近隣住区論というロジックでは収まることはできず、ニュータウンの都市構造を見直す必要が出てきている。

私達は、小さな実践を繰り返し、この都市構造の中で未開拓の場所、用途が変わりつつある場所、コミュニティの視点を変える必要がある場所など、見直すべきところを特定し、マチへの関わりしろ・余白を見つけ、新たな価値感をそこに見出すべく、住民とともに試行錯誤して過ごしている。建築設計事務所をマチへ開くことから始め、そこで出会った人や活動の中で見つけたマチの余白をひとつひとつ繋ぎ合わせていくことで、新たなカルチャーや生業を生むプラットフォームとしての機能ができつつあり、目的が曖昧ながら活動が積み重なってきている。

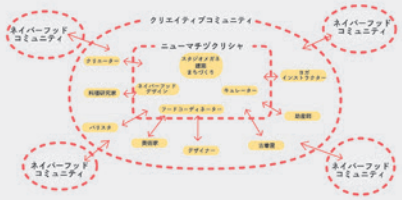


様々な視点からマチをみるため、他分野の専門家をコアとしている。

ニュータウンの都市構造を見直す



個人に焦点を当て、お互いが関わり合えるプラットフォーム



ベッドタウンとして存在するニュータウンでは、生業をもつ人たちの個性がまちに表出されづらい。個人で活動している人達のプラットフォームをつくることで多摩ニュータウンに住んでいる個人事業主たちの活動を表に出させ、またそれらの事業同士のマッチングを行うことで、まちの文化的活動の創出を増やす。

①「STOA」建築設計事務所をマチへ開いた

2022 年 10 月から、近所に住むアーティストやクリエイターの作品を中心に集めたセレクトショップとしてこれまで多摩で活動してきたアーティスト・クリエイターが持つ生業をマチに表出する場となっている。古代ギリシャ時代の市民の集う所に建てられた列柱廊建築を意味する「STOA」と名付けたこの場所で、人や空間を繋ぐプラットフォームが実際に「場」を持つことの効果は想像以上であった。建築設計事務所をマチに開きリアルな空間がプラットフォーム機能を持つと、地元の方やアーティストたちがふらっと寄って、偶然の出会いや新たな発想の源泉になる。ニュータウン内外から様々な人がそこでの偶然の出会いや何気ない会話からの新たな繋がりを求めて来訪している。

②「チャレンジ商店」近隣センターを小商いの場所へ

小さな生業を商店街などに集めて発信していくイベント「ゴキンジョショーテン」や、夜暗いニュータウンを明るく灯し、散歩しながら新たな風景を発見していくイベント「ランタンフェスティバル」を実施し、住民がマチへの関わる関わりしろを増やし、ニュータウンに眠る小さな芽を拾いあげていくことを目的としている。イベントはその場限りで終わらせず、むしろそこで見つけた小さな芽がマチの中で育っていく最初のきっかけとなるよう意識して場をつくり続けている。

③「ニュータウンファーマーズ」滞った公共空間を開く

道路に付随している暗くなっていたポケットパークを、「ニュータウンファーマーズ」というプロジェクトとして恵泉女学園大学と共に実施し、地域の人が来訪する楽しみを見出し自然と交流が生まれるエディブルガーデンとして生まれ変わらせた。ガーデンの管理や植物の育成、コンポスト運営を通して、人々がゆるく繋がる居場所として機能している。

④「商店街プレイスタディーズプロジェクト」マチを使う視点へ

「商店街プレイスタディーズプロジェクト」と称して、「子どもたちのマチのなかでの遊びを考える」をコンセプトに、商店街の象徴的な風景となっている。100m 6 伸びる真っ直ぐなアーケードに布を広げ、地元の子供達に自由に絵を描いてもらった。その絵をテキスタイルのデザインとし、サコッシュを作成し、上記のゴキンジョショーテンやランタンフェスティバルイベントで販売を行なった。当日のイベントで終わらず、作品を商品化して販売することにより、表現するだけでなく商売としてニュータウン発のお土産を販売する所までを実施することができた。

⑤「たまのニューテンポ」表現をマチへ

参加アーティスト：光岡幸一　　参加アーティスト：久村卓

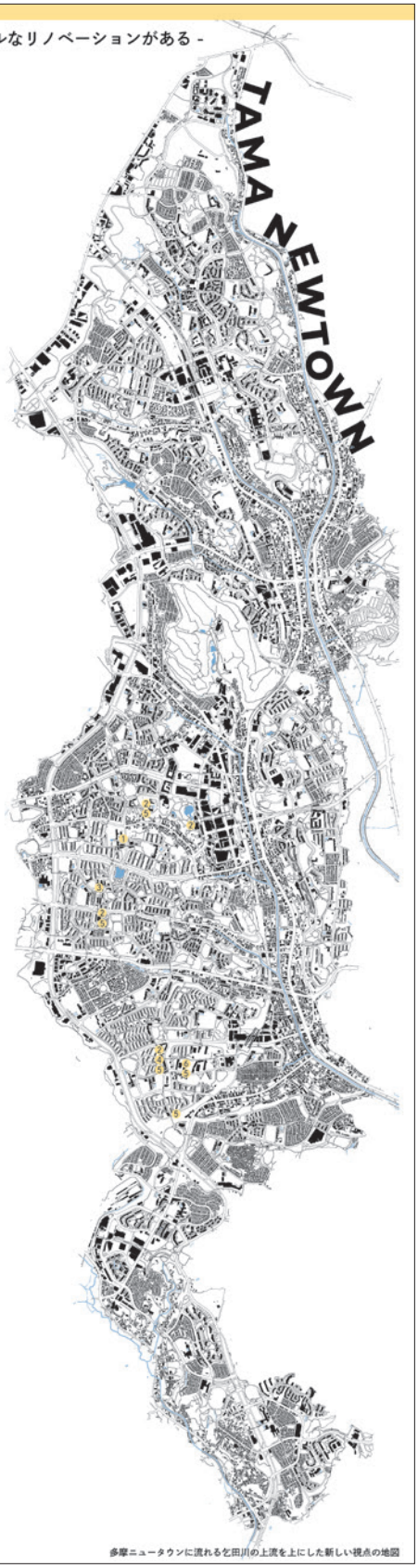
たまのニューテンポというアートプロジェクトを立ち上げ、UR 都市機構の空き店舗を社会実験として一時的に借り現代美術ギャラリーやコワーキングスペースとして使ってみることなどをしている。マチで機能不全をおこしている場所を表現の場として様々な視点から活用していく仕組みである。

ニューマチヅクリシャメンバー
左から：宮澤祐子、青木琳、寺田佳織、杉山智子、横溝惇（候補者）

⑥「まちのアーカイブ収集プロジェクト」未来へ繋げる試み

「まちのアーカイブ収集プロジェクト」では、廃校・解体が決まった小学校の思い出のカケラをアーティストと共に収集し、未来へ繋ぐ企画を行なった。解体される廃校校舎から救い出した思い出の品々は、ニュータウンの夜道を照らす明かりや、近隣センターで一息つくためのベンチなどに生まれ変わり、マチに埋め込まれている。

廃校から持ってきた什器で空き店舗をコワーキングスペースとして設え、東京都立大学の饗庭伸教授をお呼びし、これからのニュータウンについてトークイベントを行った。テレワークをしていた住民や UR、行政の方々が参加し、マチの中に議論をする場が生まれた。



多摩ニュータウンに流れる乞田川の上流を上にした新しい視点の地図

都市再生のテーマの一つである全国につくられたニュータウンのこれから。応募案では、ニュータウンの共有部である近隣センターを積極的に活用し、多くのプロジェクトと場所を生み出し続けているエネルギーが素晴らしい。背景にあるニュータウンのポテンシャルに対する深い洞察と、持続的な取組にしていく手法や姿勢がどれも、等身大で、かつユニークさやデザイン性を持っていることで、巻き込まれている人や地域がジワジワと増え続けている印象であった。全国にあるニュータウンに対して、素晴らしいモデルとしても紹介したい。

西田 司